

アメリカの学校制度

2月になり、巷ではバレンタイン商戦真っ盛りです！日本のバレンタインは、女性から男性にチョコレートを贈るのが一般的ですよ。これは某製菓メーカーのキャッチコピーがきっかけと言われていますが、女性の社会進出や高度成長期といった時代が後押しして、女性による購買力が向上した点も、ブームをけん引した要因の一つかもしれません。最近は「女性から男性への愛の告白」要素が薄れ、友チョコや自分チョコなど一大イベントとして、広がりをみせていますね。



海外のバレンタイン事情もそれぞれお国柄が反映しているようで、日本と似ているのがお隣韓国です。韓国でも女性から男性へチョコレートを贈るのが一般的だとか。一方欧米では、男性から女性へプレゼントを贈るのが主流で、花束や

カード、食事などが多いようです。ただ、男性から女性へ一方的というわけでもなく、相互に贈りあうこともよくあるそうです。夫婦や恋人同士の記念日という位置づけなのでしょう。ちなみに同じアジアでも中国や台湾、タイなどは男性から女性へのパターンが多いそうです。

とは言え、バレンタインをどう過ごすかは、性別国籍を問わず、その人次第。普段なかなか伝えられない感謝の気持ちや、親愛の情を示すきっかけの日になると良いですね。個人的には、いつもは手が出ない美味しいチョコレートを、自分のために買ってみるつもりです！



さて、今回はアメリカの学校制度について調べてみました。留学へ漠然とした憧れのある生徒さんも多いと思います。まずは日本との制度の違いを知ること、自分にとって最適な留学を考えるきっかけになれば幸いです。



アメリカには全国共通の教育制度はなく、州や学区によって制度が異なります。ただ、10年を超える義務教育期間、その後の高等教育における学位習得の過程は概ね共通しています。ここでは一般的な教育制度を記載します。

学校制度	州により異なる 小学校 5 年、中学校 3 年、高校 4 年の 5.3.4 制が多い。
義務教育	6~16 歳（ワシントン、オレゴン州は 18 歳まで） 学年を Grade と呼び、日本の小 1~高 3 までの 12 年間で Grade1~12 で表す。アメリカの義務教育は日本の幼稚園年長から始まるため、一般的に義務教育期間を「K-12」という。
学校年度	9 月~翌 6 月（州により異なる）
学期制度	州により異なる 2 学期制が多い
学費	公立：無料 / 私立：有料
その他	飛び級制度、ホームスクーリングなどが認められている。

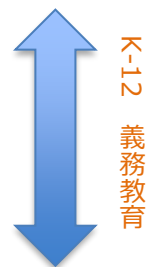
~5 歳
幼稚園、保育園

6 歳 : K
幼稚園 (Kindergarten)

7~11 歳 : Grade1~5
小学校 (Elementary School)

12~14 歳 : Grade6~8
中学校 (Middle School)

15~18 歳 : Grade9~12
高校 (High School)



参照元：

https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/usa_2014.html

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2017/10/02/1396854_001.pdf

<https://www.blog.crn.or.jp/report/02/130.html> 他

義務教育

初等教育 (Primary Education) は、原則小学校から始まります。しかし大抵の小学校には付属の幼稚園があり、小学校にあがる為の教育が受けられます。

中等教育 (Secondary Education) は、前期中等教育機関の中学校と、後期中等教育機関の高校に分かれます。公立高校に関しては受験がありませんが、高校は単位制で、選択科目が多くなります。職業に結びつくような技術科目や、主体的に進めなければいけない課題、プレゼンなど、自立と責任が求められる機会が増えます。専門性を決めやすい環境が与えられるため、戦略的に単位を取る必要があります。学校での授業はもちろん、部活動や得意分野において積極的に大会へ出場する、地域ボランティア活動に参加することなども評価の対象になります。

高校を卒業すると、高校卒業資格 (the High School Diploma) が授与されます。



義務教育以降の進路

コミュニティカレッジ (Community College) は、ほとんどが公立や州立で、その地域の住民、納税者への高等教育、継続教育の場として設けられている 2 年生の大学です。就職後にキャリアアップのため、講座を取る人も多く、仕事に役立つ技術を学べます。また 4 年生大学進学準備コースもあり、学部 3 年次編入のためのアカデミックコース、学部 1,2 年次進学を予定する予備コースがあるのが特徴です。

大学 (University, College) への進学には、一般的に日本のような入学試験は行われません。それまでの各科目の成績評定平均 (GPA) と、高校在学中に受ける SAT の成績、内申書、受賞歴などを添えて出願します。大学では、自分の専攻以外に副学位 (minor) を取得する学生もいます。アメリカの大学は授業料が高いことで有名ですが、社会人になってから大学に入り直す人もいます。一定以上の成績を保っておかないと退学になることもありえます。

大学院 (Graduate School) 特に実学系分野では、就職してキャリアを積みながら、パートタイムで大学院へ通う、退職してフルタイムの学生として大学院へ通う人が多いです。留学生が多いのもアメリカの大学院の特徴です。



特別プログラム

障害がある子供向けの教育 (IDEA : Individuals with Disabilities Education Act) は、障害のある 21 歳未満の人に適切な教育を受ける権利を保証しています。身体的障害以外にも、自閉症や発達障害など、専門家の診断が必要な場合、医師による健康診断や各教育現場にて専門家が直接介入して適切な教育を受けられるよう導いてくれます。障害のある子供のための特別支援は全て無料です。

ギフテッド教育 (Gifted Education)、飛び級 アメリカの公立学校では、GATE (Gifted And Talented Education) と呼ばれる、ギフテッドのための特別プログラムがあり、以下のような方式があります。

エンリッチメント方式：通常クラスで他の子供と過ごしますが、難易度の高い宿題が与えられたり、数学コンテストに参加するなど、子供の能力を発揮する機会を与えられます。

プルアウト方式：通常学級に通いながら、一定時間をギフテッドの子供を集めたクラスで過ごします。(週 1 回同じ地区のギフテッドの子供を集め、高度な講義を受けさせたり、特別プロジェクトに取り組むなど)

アクセルレイト方式：いわゆる飛び級、飛び入学です。子供にその能力があると判断された場合、学年を飛び越したり、上の学校に進んだりします。

ホームスクール：敢えて学校へ行かせず、自宅での教育を選ぶ家庭もあります。アメリカはホームスクールのプログラムが充実しており、ギフテッドの子供用のプログラムもあります。

ドラマや映画で見るアメリカの学校生活って楽しそう・・・と思いましたが、改めて調べてみると、学業に課外活動に、なかなかタフな印象です。それでも一度きりの青春。真剣に留学を考える生徒さんを、私たちは応援します！

